

## 今展のコンセプト

### 重層する写真と油彩画

(虫眼鏡のレンズ越しの写真及び自作のカメラ・オブスキュラによる写真のことなど)

今林 明子

何気なく過ごす日常の中で、ふとした瞬間に沸き起こる不安や虚無感。

これは眼前に迫る大きな壁のようなものではなく、もやもやとした薄い膜や霧の類で、実体を持たない。よくわからない存在だからこそ恐ろしく、そして心惹かれるのだ。

私はこのような日常の中にある感覚的な不安や虚無を表現しようと現在のシリーズに取り組んでいる。

幼少期の記憶の中で写真が趣味だった父が撮影したスライドをアパートのふすまをスクリーン代わりにして映したぼんやりとした光の光景が鮮明に残っている。大学在籍時は油彩画の研究室に所属し、用意されたモチーフを実際に見ながら描く授業に多く参加したが何故かしっくりこなかった。自身の表現について模索するうちに、直接モノを見て描くよりも何かもう一つ別のフィルターを通して見る、前述にあるようなピンボケの光景に心惹かれることがわかり、絵画制作の中に写真を取り入れるようになった。私はカメラアイを通じて異方向から絵画のリアリティとその可能性を探求している。

ここ最近では、不安や虚無感が生じる基となるものを“心的な距離”と捉え、これらを重層のプロセスと共に複数のレイヤー（層）を重ねることで表現しようと試みている。

ポートレートのシリーズはポーランドの蚤の市で見つけた雑誌やポストカード、版画、古写真から人物を抽出し、虫眼鏡のレンズ越しに撮影した写真を基にしている。この撮影した写真をプリントアウトしたものに描画、ドロッピングなど絵画的行為を施したのちにスキャニングし、それをさらに絵画（タブロー）へと発展させる。絵画と写真、異なる表現手法を交互に重ねてレイヤー構造を作ることによって絵画と写真の境界を曖昧なものとし作品を重層化している。

また、私が絵画制作に油彩を用いるのは油絵具がグレージングとモデリングの両方に適しているからだ。タブローに移行した段階で油彩によるウェットオンウェットの技法を用いながら、油絵具の皮膜を薄く時に厚く盛り上げることを繰り返してより絵画を重層的なものにしようと試みている。

私の作品の画面に登場する円の弧のようなラインは虫眼鏡のレンズサークルを映したものであり、これは作品の中に物理的な距離感を演出するためだけでなくモチーフを見る鑑賞者自身の視点を意識させるためだ。

上記の制作とはまた別に写真と絵画の関係性を探る中で写真と絵画をつなぐ媒体としてカメラ・オブスキュラを用いた絵画制作を2017年より行っている。

カメラ・オブスキュラは15世紀あたりから素描する為の光学装置として多くの画家たちがもちいてきたもので、代表的な作家の一人としてヨハネス・フェルメールがあげられる。2016年文化庁芸術家海外研修制度でポーランドの古都、クラクフ芸術アカデミーで研修生として在席し、反射鏡式のカメラ・オブスキュラを自作し、作品作りを行った。

私にとってこのカメラは絵画と写真をつなぐ媒体のようなもので、カメラのレンズを通した光景はどこかおぼろげな独特の美しさをもっている。スクリーンに反射する像をトレースした線とで表現する世界を追求している。ここで学んだおかげで大胆な表現に挑む勇気を持つ事が出来るようになった。ぜひ今展でこれらの作品を観てもらいたい。

2018.6



参考作品 「Still life」 2017年 油彩・キャンバス 90.0x200.0cm

